



製本工場見学会に参加して

藤平 佳代

2007年7月18日、ナカバヤシ株式会社の協力を得て兵庫県養父市にある製本工場を訪れ、製本や修復作業の工程などを見学しました。当センターでは、毎年、年明けから年度末にかけて医学雑誌などの製本を依頼しており、いつもきれいに装幀されて戻ってくる製本を見て、どのような工程で作業が行われているのか以前から興味がありました。また今回の見学会では普段は目にするのできない職人技も見られるということで、とても楽しみに参加させていただきました。

最初に製本作業を見学しましたが、ここでは1日約3,000冊の製本が行われているとのこと、工場内に足を踏み入ると全国の図書館や企業などから製本の依頼を受けた雑誌がたくさん並べられていました。

搬入された雑誌類はまずリストの明細どおりに届いているかどうか照合が行われ、製本の指示が確認されます。その後、編集指示に基づいて広告ページの除去や背表紙がカットされ、それぞれの雑誌を綴じ合わせる作業が行われます。

綴じする方法としてはオーバーソーイングとミシン綴じがあり、それぞれの特性が異なるため依頼の指示に沿って行われているとのことでした。また「The Lancet」などの背表紙がない「ワサ本」と呼ばれる雑誌類は、背を削



ると文字や写真などが削られてしまう恐れがあるため、背を削らないで背の部分を縫い合わせたり小さな穴を開けて綴じ合わせたりする方法が取られていました。

綴じ終えて一冊にまとめられたものは周辺の余白部分を切りそろえ、表紙を貼る工程に移ります。ここでは背表紙と表紙のクロスが貼りあわせられ、背表紙に花形を刻印、ネームや巻・号、タイトルなどが入れられて製本が仕上がります。

製本作業は、ある程度オートメーション化されていますが、それぞれの雑誌に合わせて製本するのでオーダーメイド的な部分も多く、機械だけではすべての作業を行うことができないそうです。そのため随所で人間の勘と経験が頼りにされているとのことでした。

修復作業では虫損および破損した資料の補修方法である「すきはめ」や「裏打」「繕い」などについての説明があり、実際に作業を見せていただきましたが、その緻密な作業に思わず見

入ってしまいました。特に「繕い」は資料の欠損部分のみを補修するため、もとの資料と修復部分が凸凹にならないようにピンセットなどを使用した細かい手作業が行われており、とても根気のいる大変な作業であることを実感しました。

およそ4時間かけてじっくりと見学させていただきましたが、想像していた以上に多くの工程があり、初めて見聞きすることに驚きと感動

のし通しでした。

大阪から工場までは特急電車に乗り約2時間15分、それから車で30分ほどと少し場所的には遠いですが、その距離も苦にならないくらい充実した見学をすることができました。紙面では大まかな作業の流れしか紹介できていませんので、皆さんも機会があればぜひ一度参加されてみてはいかがでしょうか。